
詩集

如月水木

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詩集

【Nコード】

N4775D

【作者名】

如月水木

【あらすじ】

詩集です。サブタイトル通り、話は違っております。1つでも興味がありましたら、どうぞご覧ください

かくや姫

三寸ばかりの黄金に輝く娘
溢れかえる光の輝きが周りへ漂う
やがて育った汝は妖美の容貌
性欲持つべき漢が集まり

「我こそ抱くのだ」醜き欲望
冷めた感情持ち合わす汝
決して首を曲げる事を許さず

しかし しつこい漢が五人現る
呆れた汝 条件突き出す
誰一人と 成功する者はおらず

艶を含んだ煌く髪を
風と共に後方へ払う
人前で姿を見せず
面を晒す事を拒絶
傍らに居る事を誓った帝
深き闇を孕べき汝への想い
丹花の唇に触れる日を願う

「長き爪して 眼を掴み逸らす！
さか髪を取りて かなぐり落とさむ！
さか尻をかきいでて ここの公人に見して恥を見さむ！」
翁と嫗と過ごした廿余年
やがて時は終わりを告げて
感たるに堪えない者達
逆らえきれぬ運命にたてつく

冷酷非常なお姫様

楽しいお話なんてそこにはなくて。

裏切り 別れ 苦痛 憎しみ

世界はもう これほどまでに
美しく 切なく

終わりによって生まれる感情
。

空へと顎を向けると雫で重なる月夜
穏やかに流れる詩を心身で味わう
通るはずの無い小さな望みは
亜麻色の瞳にて絶望を知る

慰めなんてものはあらず

仰ぎ 嘆き 泣き 失望
。

あの眩しさはどこへいったか
日々沈んでゆく血の涕の華
。

ついに 宵内に広がる月輪

迎えにあがった 月の死者から

誰一人と 汝を守る者はおらず

嫗の腕に収まりていた宝娘

死者と共に暗雲へ導かれて

感謝を込めて渡す御手紙

翁と嫗には要らぬ不死薬

焼き払われ姿を消し去る

脱ぎおく衣を胸に抱き

羅藍乗りゆく汝に手を振る

「今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひいでける」

最後に知った本当の愛と真は帝へと

もう知ることは無かろう愛情

脱ぎいた衣と共に失う記憶の旋律

宵内へと響く悲痛の叫び
I

赤頭巾

許してね赤頭巾 この恋を
許してね赤頭巾 この愛を

君は僕に笑顔をくれた
だから僕は君を貰うよ
君は僕に話してくれた
だから僕は君を奪うよ

歪んでいるなんて
そんなの僕が決める事
助けてだなんて
そんなの僕が救ってあげるよ

皺無き滑らかな感触
望んでいたものより儚くて

なぜ 僕を拒むの？
なぜ 僕だけを見てくれないの

全ての欲を満たしても
この先の未知を教えても
まだ 君は来ないね

全ての欲を抑えても
この先の終わりを止めても

まだ 君は来てくれないね

「おばあちゃん？」

赤頭巾

その声で僕を呼んでくれ
その音色で僕を癒してくれ

「赤頭巾」

どうして

僕は呼んでいるのに
僕は求めているのに

真と偽を疑う事の無い君が
そんな瞳で来ないで
僕を捕らえていない純白な君が
そんな姿で来ないで

壊したくなるから
喰べたくなるから

「キャーーーーッ!!!!!!」

お願い

恐がらないで

喰べるだけだから

微笑で埋めるだけだから

そんな瞳で 顔で 姿で

叫ばないで

同じく燃え上がる釜戸に

白き肌を隠していた物を投げ込む

ねえ 僕を愛して

僕の中で鳴いて

消えゆく少女 狂った狼

永久に残るのは 少女の服を燃やす釜戸のみで

「赤頭巾」

一生僕と一緒にだね

「赤頭巾」

やっと願いが叶ったよ

シンデレラ

灰かぶりよ

私の目の前で跪きなさい

灰かぶりよ

私の目の前で崩れ落ちなさい

何故そんなに憎たらしいの
何故そんなに恨めしいの

私の手で壊したい
私の手で潰したい

もつと縋りつきなさい
逆らえきれない運命に
もつと悲しみ 泣きなさい
私の足元で墮ちなさい

世界一消え失せて欲しいあんな
世界一幸せになる権利はないはず

なのに

何故
ー？

何故？
誰か教えなさい

偶然なんてないの
幸福なんてないの

全てあんたには与えられてないはずよ？

ああああああ
このナイフで

ああああああ
全てを掴もうとしたの

どこがいけないの？
何が悪いの？

ああああああ
引き契ってやりたいわ

ああああああ
この疼く衝動

靴よ
金の靴よ

銀の靴よ

私の足に納まりなさい

ああああ

いつそ殺してやろうか

ああああ

ああああ

ああああ

いつしか目の前に広がる暗黒の世界

ああああ

やっ

と

あなたの顔から逃げれるわ

やっ

と

あなたの姿を見なくてすむわ
憎たらしいのに理由なんていない
恨めしいのに理由なんていない

小鳥よ

広がる青空を奪った悪魔よ

灰かぶりから解放してくれた天使よ

光なんていらない

あんたの輝きなんていらない

灰かぶりよ

私の目の前でどんな顔をしている？

灰かぶりよ

偽造の同情なんてもらっても嬉しくないから

傷

圧迫されそうなんだよ
押しつぶされちゃうんだよ
潰されちゃうんだよ

泣きたいんだよ
泣けないんだよ
嗚咽が漏れちゃうんだよ

どうして
なんで
おしえてよ

嫌なの
誰にも言いたくないの
来ないで 寄らないで

もうやめて
そうだんしてよ
ついているよ

嫌なの
触らないで 入ってこないで

その涙を信じきれないの
嘲笑いの表情が浮かぶから

他人に縋っても何にもならない
他人に私の何が分かるか
他人に話す必要なんてない

そんなに教えてほしいの？
そんなに知りたいの？

一瞬の好奇心
一生の後悔になるってまだ分からない？

ついているよ

いらない
私は何も要らない

気持ち悪い？
だから？
どうしたの？

青白い手に映える傷
癒える時はいつだろうね

不安になりたくないから
安堵に飢えたいの

存在価値を確かめたいの
見たいの

ずっとずっと
見ていたい

紅く紅く
自分の価値を分かってくれ存在

細く細く
手首に巻きつく蛇

華麗に優雅に
消えぬ存在として纏りつく

舌と同化となった血液
唇の端を伝う

理解してくれるのはきつと
この刃だけ

分かってくれるのはきつと
何も話さないこの傷だけ

言葉なんて要らない
優しさなんて偽り

ぬぐってくれる布よりも
恵んでくれる笑顔よりも

この煌めく刃が尊くて

この蛇が愛しくて

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4775d/>

詩集

2010年10月18日12時28分発行